

事業2 5, 6年次_研究・臨床実習期間中の海外渡航支援

番号	氏名	渡航先	国・地域	渡航先での受入期間
1	N・Y	モナシュ大学 (Casey Hospital)	オーストラリア	2023/4/17～2023/5/26

令和5年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学部医学科	6 年	学籍番号：*****	氏名：N・Y
--------	-----	------------	--------

渡航先国：オーストラリア
受入機関名：モナッシュ大学（Casey Hospital & Victorian Heart Hospital）
渡航先機関での受入期間： 令和 5 年 4 月 17 日 ～ 令和 5 年 5 月 26 日（ 40 日間）

<活動目的>

幼い頃、家族の仕事の都合でオーストラリアに数年間住んでいたこともあり、その際、**The Alfred Hospital** にて心臓血管外科医の父が移植チームの一員として働いていたため、昔から移植に携わる姿を見てきました。そこで、6年次の選択実習において父の原点となった病院での実習が可能であると知り、将来海外で実際に働くことも視野に入れているため、海外で実習できる機会があるならば、ぜひその機会を活かして行きたいと思いました。結果的には先方の都合により、**The Alfred Hospital** での実習は実現出来ませんでした。海外実習や海外の医療現場の実態を間近で見て、国際交流を図ることを目的としました。

<活動内容>

実習はメルボルン市内からトラムと電車を乗り継いで約2時間の **Casey Hospital** の循環器内科で最初行われました。しかし実習の1週目にて現地の先生から、**Casey Hospital** では処置としてエコーしか見ることが出来ないのので **Victorian Heart Hospital**の方がたくさん見学できる、と教えて頂き、コーディネーターにダメ元で相談してみた結果、2週目から **Victorian Heart Hospital** 循環器内科チームでの実習が可能となりました。**Victorian Heart Hospital** も郊外にあり、メルボルン市内からトラム、電車、バスを乗り継いで約1時間強の場所にありました。当院は今年2月に開院したばかりの、非常に新しい、ビクトリア州初の心臓専門の病院です。新しい病院のため、敷地を最大限に利用したガラス張りの開放感あふれる構造をしており、各病室からの眺めも壮観なものでした。国柄なのか、実習のスケジュールは非常にフレキシブルなもので、初日の **Dr. Sean** によるオリエンテーションの際に、やりたいことを自由にやってくれたら良いよ、と言われたため、現地の最終学年の学生と同じようなスケジュールで実習を行わせて頂きました。医師をはじめ、看護師、薬剤師、受付の方は皆フレンドリーで優しく、積極的に話しかけて、やりたいことを伝えると親切に対応してくださいました。

1週目に実習を行った Casey Hospital では主に回診についていき、胸痛や不整脈で搬送されてきた患者の薬物での管理方法であったり、処置が行われるまでの待ち時間の管理であったり、あまり緊急性のない比較的軽症な症例の **management** について学びました。この病院は主につなぎとして役割を果たしている病院のようで、全体的にゆったりとした雰囲気でした。

2週目以降の Victorian Heart Hospital での実習では、現地の医学生と同じように主に回診で多くの症例を診ました。冠動脈疾患のみならず、不整脈や弁膜症の患者がおり、**Consultant** と呼ばれる専門医の資格を持った医師、**Registrar**、**Junior Doctor**（日本で言う研修医に当たる医師）で構成されたチームの一員として薬物の **management** や治療法について学ばせて頂きました。具体的には心不全において利尿薬や降圧薬の管理、冠動脈疾患であれば冠動脈造影の読み解き、不整脈においてはどの薬剤を用いるのが最適かなどをガイドラインや論文を活用しながら医師の方々と共に考える機会も得ることが出来ました。ただ回診についてだけでなく、カニューレを必要としている患者にカニューレを挿入したり、血液検査のために血液を採取したり、時には、輸血などの同意書を直接患者にその必要性とリスクについて説明して取ったり、と今までの実習で行って来なかったようなことを行えました。また、カテーテル室に行き、**PCI** や **TAVI**、アブレーションなどの様々な症例を見学しました。心臓血管外科の方では **CABG** やペースメーカー挿入、**ICD** 挿入などの症例も行っていましたが、予定が合わず、見学出来なかったことはやや心残りです。

回診実習のほか、実際の外来も見学させて頂きました。私は **Pediatric Cardiology** の外来に行きましたが、そこでは心房中隔欠損で手術待機中の患者や **Noonan Syndrome** 疑いの患者などがおり、様々な経験を積むことが出来ました。実際に問診・診察も行い、心雑音などが聞こえたら解釈をして、先生に英語で発表する機会も与えられました。

また、不定期に **Junior Doctor** によるベッドサイド実習が開催されて、参加しました。具体的には **Cardiology exam**、**PVD exam**、**Gastro exam** などテーマを決めて、学生が患者に **Junior Doctor** の前で実施して、レポートしていく、といった流れで行われました。良かった点や改善すべき点、コツなども教えて頂き、非常にためになりました。毎週月曜日、**Dr. Sean** による **Case of the Week** といって、術前の薬物管理、**MET call**（患者の急変時、院内全体に鳴る緊急コール）、カニューレなどの実技などこちらもテーマに則って症例を自ら選び、プレゼンして皆で議論する場にも参加させて頂きました。自由なディスカッションが飛び交う場であり、少しでも疑問点があれば、その場で解決できるように発言し、非常にインタラクティブな場でした。

6週間の間、循環器内科だけに特化して、現地の学生と全く同じように扱ってもらい、課された疾患について **management** や疫学を一通りプレゼンするなどの課題もこなし、オーストラリアで行われている医療現場を間近に見ることが出来て、医療制度について学習することが出来ました。

<活動成果>

実習が始まるまでに一通りは循環器内科にまつわる医学英語は学習していったつもりでしたし、日常会話レベルの英語には自信がありましたが、はじめは非常に苦労しました。オーストラリアは多民族国家であり、世界中から人が集まってきている国です。実際に私が実習を行った際にも、マレーシアから医学生が留学しにきており、イラン出身の先生、パキスタン出身の先生、中国出身の先生と発音や話し方も異なる人が混在していました。薬の名前一つとっても日本での発音の仕方と英語での発音の仕方は同じな訳がなく、最初の2週間ほどは何が議論されているのか言葉を聞き取るだけでも必死でした。しかし、徐々に慣れてきて、3週目以降からは今どういった状況なのか、何が問題点となっているかなども聞き取ることが出来るようになり、質問された際には英語で答えることも次第に出来るようになっていきました。

日本での実習との違いで一番実感したことは学生の積極さです。ありきたりで良く言われていることかもしれないですが、現地の医学生は失敗することから得られるものがあると理解しており、間違えることを決して恐れず、積極的に疑問点があれば果敢に質問していきます。そのためか、先生方も教えることに熱心な方が非常に多いと感じました。私も実習の終盤にかけて積極的に問いかけることが出来るようになったと思いますし、英語で仕事するというのは一体どのような感じなのか今回の実習を通じて体験することが出来ました。

また、日本のクリクラで循環器内科のラウンドをした際には、まだコロナ禍で患者の問診や診察といったことが出来ませんでした。そのためか、患者と接することにおいて個人的にやや壁を感じていました。しかし、オーストラリアの実習においてそのようだと意味がないと思い、思い切って積極的に話しかけてみると皆さん優しく、私の拙い英語でも真剣に向き合ってくださり、話を聞いてくださいました。様々な徴候を直で学ぶことができて、非常にためになりましたし、コミュニケーションをとることで医師と患者の信頼関係が築かれていくということも実感しました。

総合すると、病棟や外来を見学することによって、オーストラリアと日本の医療の仕組みにおける相違点について考える機会を得られました。オーストラリアは **General Practitioner (GP)** 制度がしっかりしており、他病院との連携を取る際のスムーズさに驚きました。日本にはない制度であったので、新鮮に感じたと共に、多民族国家ならではの誰もがスムーズに医療を行えるための仕組みとして一役買っていると感じました。

<今後の抱負>

本実習では非常に有意義な体験をさせて頂きました。英語を話しざるを得ない環境に自分を6週間置くことで、英語力を向上させることが出来ました。様々な背景を持った人々と一緒に実習を行ったことで、文化の違いや考え方の違いを理解して、知見を広めることも出来ました。物事が進んでいくのを黙って見ているだけでは何も始まらないということも改めて感じましたし、今後は自分のやりたいことや考えは積極的に発信していこうと思います。また、日本の医療制度の更なる発展に貢献できるように、精進したいと思います。

<謝辞>

この度、本実習を支援してくださった岸本忠三先生及び岸本国際交流奨学金制度に関わるスタッフの方々、そして本実習を整えてくださった医学科教育センター、医学科国際交流センターの先生方等には心から感謝申し上げます。また、実習でお世話になった **Casey Hospital**、**Victorian Heart Hospital** の先生方にもこの場を借りてお礼申し上げます。

<実習スケジュール>

	月	火	水	木	金
実 習 内 容	回診 Junior doctor の仕事手伝い Case of the Week	回診 Junior doctor の仕事手伝い	回診 Junior doctor の仕事手伝い	回診 Junior doctor の仕事手伝い	回診 Junior doctor の仕事手伝い

上記に加えて、ベッドサイド実習が平均して週に2回、**Junior Doctor** の先生の手の手空いた時間に不定期に行われました。また、急患が来たら、**ED** での対応、そのままカテーテル室での処置見学なども行いました。非常にフレキシブルなタイムテーブルで朝は8時開始、仕事がなく早い時で 14:00～15:00、仕事が重なった時は 16:00～17:00 に終了といったようなスケジュールでした。